LOST MAN ～I'm your メディーーーーーーーーーーック！！～

かたり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＳＴ　ＭＡＮ　～Ｉ' ｍ　ｙｏｕｒ　メディーーーーーーーーック！！～

【Ｎコード】
Ｎ０１７２Ｗ

【作者名】
かたり

【あらすじ】
【原作未プレイでもご覧頂けるように努力しています】
ちょっと強面だけど仲間思いな新型神機使いの青年、ナハトが頑張るお話。
ソーマやコウタ、アリサといった面々と結ばれた絆がナハト本人も知らない彼の秘密を紐解いていく。
新兵で衛生兵だけど二週目主人公のような強さを持つ彼がアラガミ相手に無双したりしなかったり。

原作ストーリーを軸に展開していきます。

Prologue

まるでなにも描かれていない真っ白なキャンパスの中に迷い込んだようだった。

少年はゆっくりと周囲に目を配る。

床がない。

天井がない。

壁がない。

見渡す限りとにかく何もなく、真っ白に塗り潰されただけの空間だった。

「……っ」

静寂が耳をつんざく。

少年は浮遊する体を縮こまらせて両手で耳を覆った。

落ち着きをなくした呼吸音がやけに大きく聞こえ、心臓はさらに早鐘を打ちならす。

きゅっと目を瞑り恐怖にあらがった。だが瞼に焼き付いた白が逃がさないとばかりに追い打ちをかける。

今度は目を覆った。強く強く。なにも見たくないと心が悲鳴をあげる。

「だれか」

今にも泣き出しそうな声で呟いた。

その声に応えるように、穏やかな熱を持ったなにかが耳を覆った。

人の手だ、と少年は思った。

こおぉ……とかすかに聞こえてくる、体を流れる血の音。

なにもない死んだようなこの世界で、生きているものが発する音はとても心地よく感じられた。

吐く息が落ち着きを取り戻した頃、少年は顔を覆っていた手を誰かの手にそっと重ねた。

おそるおそる背後を振り返る。
ありがとう、そう伝えようとした唇が半ばで止まった。
それは、人の形をした黒だった。
「……っ！？」
少年は耳をふさぐ手を振りきってそれから逃れた。
目も鼻も口もないのっぺりとした顔。
少年と似た、服をまとわない華奢な体。
白だらけの空間の中、その黒はすべてを飲み喰らう陰鬱な闇のように感じられた。
黒いそれは振り払われた手を見つめ、やがて少年を見た。
ひどいじゃないか、とでも言いたげな仕草だった。
少年はびくりと体を震わせると身を翻した。逃げようと本能のままに足を踏み出す。
だが足を着く地はなく浮遊する体は思うように進まない。
幾重もの蜘蛛の糸が絡みついたように不自由だった。
それでも前へ前へ。距離間もつかめない真っ白な果てのない世界を、ひたすら水をかき分けるように体を滑らせて逃げる。

逃げて逃げて、逃げまくった。

黒いそれは着いてきていないように思えた。
それでも恐怖心に駆られるまま動かしていた足が、ついにもつれた。
「……っく」
転ぶ直前受け身を取ろうとした体が慣性にしたがって一回転する。
そしてまた浮遊。
受け身を取ったままの姿勢で荒い息を吐く。
しばらくうずくまったまま動けなかった。
やっと顔を上げ、逃げてきた道をおそるおそる振り返ると、そこにはやはり何もなく白が広がるだけだった。

ため息ひとつ。
少年は額の汗を乱暴に拭って重い体にむち打って立ち上がる。
ふと終着点のない前を見ると、遠くに黒に近い灰色の靄が立ちこめていた。
ひっ、と少年の口から恐怖にひきつった呼気が漏れた。
靄の中になにかの影を見つける。
だが、それはさきほどの人を形どった黒ではなかった。
「あ……」
あまり視力がよくない目を凝らす。
そうしている間にも靄は大きく膨れ上がり少年のところにまで手を伸ばそうとしていた。
だが少年はそれに見入られたようにぴくりとも体を動かせなかった。
いつの間にか恐怖心は消え失せていた。
靄のなかの存在に、心のどこかで懐かしさを覚えていた。
その懐かしさ運んでくるなにかが音も立てず、その存在感だけを誇示させて迫ってくる。
もう少し、もう少しでその存在を捉えることができる。
あと少し、もう少し――
少年は夜に浮かぶ月のような色の瞳を大きく見開いた。
ドスッという音が耳に入る。
いつの間にか黒い杭のような腕に腹を貫かれていた。
床に引き倒すように宙に縫い止められる。
あつい、と少年は口の中で呟いて、腹を貫く腕の先、光沢のある黒い鎧のような体を見た。
「こふっ」
せき込んで口の中が鉄の味でいっぱいになる。
少年は震える手を伸ばして黒い腕をそっと撫で、かすむ視界を瞼で遮った。

こんなこと、前にもあったような気がするな……。

少年の意識は彼を殺した黒い腕よりも黒い深淵へと落ちていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１　コウタ（前書き）

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１コウタの改稿バージョン。
９／１４　改稿前を削除しました。

Episode. 1　コウタ

……へんな夢みた。
夢の中で少年だった青年――ナハトは、最近ようやく見慣れてきた自室の天井をぼんやりと見上げた。
既視感を覚える夢だった。死んだような真っ白の世界。立ちこめる黒い靄。そのなかに潜む、圧倒的な存在感を放つ黒の鎧。

……腹を貫かれ死んでいく自分。

ナハトはベッドの上でうんっと伸びをした。
考えたって仕方のないことだ。夢に意味なんてない。
のそのそと起きあがって「支度しよ」と呟いた。
その一言で頭を切り替える。
はじまったばかりの今日も、偽りの神との命のやりとりが待っている。
雑念に気を取られ一瞬でも立ち止まれば、簡単に命を刈り取られてしまう仕事だ。
それでも、生きていくためには戦うしかない。
夢のなかで死んでも、現実で死ぬのは嫌だった。
――知りたいこともあるし。
寝ぼけ眼をこすって欠伸ひとつ。
ぼやける視界のなか枕元に置いた赤いフレームの眼鏡を手探りしながら、昨日負った怪我の具合を確かめようとパジャマにしている短パンの裾をたくし上げて左足のふとももを晒す。
敵の攻撃をガードし損ねた時にできた裂傷は、何事もなかったようにすっかり綺麗になっていた。
やっと見つけた眼鏡をかけて、ベッド脇の背の低い棚に置かれたデジタル時計を確認する。

２０７１年３月２日、時刻は〇六三〇。
早朝訓練の時間は過ぎていた。昨日の負傷により出なくていいと指示をされたが、それはそれで落ち着かない。
もう一度、両腕だけで伸びをして洗面所へ歩き出す。着くと洗面台に取り付けられている鏡に映った、外見年齢１６．７歳の男と目が合った。
……ゴッドイーターになったら視力回復すると思ったのに。
寝癖で跳ねた黒髪を無造作にいじりながら、特別に作ってもらったコンタクトレンズが入ったケースを備え付けの棚から取り出す。温めの水で顔を洗って、ついでに手櫛で髪を整える。保存液に浸してあるレンズを黒いまつげに縁取られた双眸に貼りつけて一息。
「……がんばろ」
まったくやる気が感じられない声が出た。
うん、普段とまったく変わらない声だ。気にしたら負け。

藤木コウタはフェンリル極東支部、通称【アナグラ】のエントランスの二階できょろきょろと辺りを見渡した。
フロアの両端に設置されたターミナルで装備を整える者。戦果や敵の脅威を語り合う者。次の作戦を練る者。みな一様に肌を刺すような緊張感のなかにも、たしかな闘志を漲らせている。
そしてもう一つの共通点、片方の手首に嵌められた大きな赤い腕輪――
彼らはゴッドイーターと呼ばれるフェンリル所属の戦士、【神機使い】だ。
この地球は今、すべてを喰らう偽り神【アラガミ】によって存亡の危機を迎えている。
アラガミは『考え、捕食を行う一個の単細胞生物――オラクル細胞』の集まりであり、２０５０年に出現。地球上に存在するすべて

の生物の敵となった。
彼らは捕食することによって学ぶ。
もっと速く走るには。もっと頑強な体にするには。空を飛ぶには。過酷な環境に適応するためには。もっと殺傷能力をあげるためには。
捕食対象である人間は食い荒らされ、文明すら破壊され国家というものも今は存在しない。
もちろん、人々はただ手をこまねいて見ているだけではなかった。
各国の首脳はすぐさま軍隊を派遣し討伐を試みた。だが、アラガミが持つオラクル細胞の、しなやかで強固な細胞結合は既存の通常兵器ではまったく破壊できなかったのだ。
そんな折、先立ってアラガミの脅威に気付いていた製薬会社のフェンリルがオラクル細胞を利用したオラクル物理学技術を確立し、アラガミの捕食傾向を司る偏食因子の存在を突き止めた。
そして神を喰らう者【ゴッドイーター】が誕生した。
ゴッドイーターたちは、アラガミと同じオラクル細胞を用いて作られた生体武器【神機】を駆って偽りの神々を屠る。
しかし、神機によって断ち切られ霧散したオラクル細胞群はやがては再結合し新たな個体を形成する。
対抗手段を持っても、人類は決定的な一打を与えることができない。
フェンリルが開発した技術やゴッドイーターたちの奮闘により人口の減少に歯止めがかかりつつあるが、アラガミと対峙するゴッドイーターとて、戦闘で力尽き捕食されることも珍しくない。
だが、絶望に満ち溢れた世界の中にあって、コウタの心はさらに推力を増しつつあった。
その理由は――、
「あ、いたいた！　ナハト！」
コウタは弾んだ声をあげて区画移動用エレベーターから現れた目的の人物へと駆け寄った。
名を呼ばれた青年が軽く手を振って応える。彼は線の細い体を狙

撃兵の制服に包んでいた。全体的に洗練された印象を与えるが、目を引くのはその白さだった。一度も日の光を浴びたことがないような真っ白な肌。青みがかった灰色の双眸は光の加減によって夜に浮かぶ月のような優しい色味を帯び、一切の光を通さない黒髪は肌の色とあいまって強烈なコントラストを描く。白い面(おもて)はなんの感情も写し出していないように見えた。ナハトのその姿は本当に人として熱を持っているのかと疑いたくなるものだった。

コウタの呼びかけに応えたのはナハトだけではない。彼の名に反応して、その場にいたほとんどの者が手を止めて、あるいは話を止めて非現実的な姿に視線を送る。

「ああ、あいつが……」「なんか取っつき難そう」「アルビノ？」「不気味な奴だな」「昨日ソロでコクーンメイデン2体とザイゴート1体やったってよ。」「もう！？　入ったばかりなのにやるじゃん！」「ソーマとはまた違った感じの威圧感だな」「新兵なのに贔屓されてる感じが鼻につく……」

コウタとナハトは同日に神機の適合試験を受け、合格を果たした同期の仲間だった。神機を扱うには体と融合し生涯外すことが出来ない赤い腕輪、正式名称【Ｐ５３アームドインプラント】を装着しなければならず、それを装着するのは大変な苦痛を伴った。それを乗り越えると怪しさが具現化したような博士にメディカルチェックをされ、なにも異常がなければ基礎体力の強化、神機の扱い方、戦闘訓練などのプログラムが組まれる。教官の雨宮ツバキから鬼でさえ音を上げるような訓練を受け、ようやくゴッドイーターとして戦場に送り出されるのだ。

ゴッドイーターは神機の適合率の低さゆえになる者が少なく、新人2名は互いを励まし合い過酷な訓練に取り組んできた。コウタはアサルト型の旧型遠距離式神機使いとして。そしてナハトは旧型の接近式でも遠距離式でもなく、この極東支部初の、銃身と刀身と装甲を持ち様々な場面に対応できる【新型神機使い】として。

コウタは声を潜ませて彼を値踏みする周囲を無視して、

「おっはよう！　きのう怪我したとこ、大丈夫？」
「おはよ。ちゃんと治ってるから任務に支障はないと思う」
　それを聞いて安心したが、今度は少し心配になった。
「お前なー……任務任務って、入ったばかりでそんなに張り切ってると後で疲れるよ？」
「張り切る……てか、仕事だしな」
　それにあんただって外部居住区の装甲壁がアラガミに突破されたって聞けば、止められてもすっ飛んでいくじゃん。無茶すんな。
　と、逆に少し怒った顔で指摘されて「うっ」とコウタは言葉を詰まらせた。見た目によらず衛生兵でもあるナハトは怪我に敏感だ。軽く身振りもつけて慌てて話を切り替える。
「朝食とった？　まだだよね？　一緒に食べよう！」
「まだ食ってな……なぁ、転ぶって。あんまり強く引っ張んなよ。……聞いてる？」
「聞いてない！　さっさと食って精つけてアラガミぶっ飛ばそうぜ！」
「……張り切りすぎて怪我すんなよ？」
　背後で呆れたような、それでいて優しい言葉がかけられる。周囲の好奇に満ちた視線に見送られながら、区画移動用エレベーターにナハトとともに乗り込んだ。
「今朝の配給なんだっけ？」
「ピラフにトマトスープ」
　ナハトがエレベーター内の掲示板に貼られた『配給のお知らせ』の今日の行を指でなぞりながら答える。コウタは彼の指先が示す箇所を食いつくように見て歓声をあげた。
「おおぉっ！　すっげー豪華じゃん！」
「でも夜はジャイアント・トウモロコシだけどな」
「うぇぇ……あれ食いにくいんだよなー」
　コウタががっくりとあからさまにテンションを落とす。感情の起伏こそあまり感じさせないが、それはナハトも同様だった。

【フェンリル極東支部】は生産と消費活動が自己完結しているアーコロジーで、たとえ極東支部以外のフェンリル施設がすべて壊滅しても単体で存在し続けられる機能を備えている。大きく分けて中央施設と外部居住区があり、中央施設は地下へ向かって数百メートルの巨大な縦穴構造になっている。そのためにフェンリル職員からは【アナグラ】と呼ばれているのだ。施設にはオラクル技術を応用して食品を生み出す食料生産区や、身の回りの生活用品を作る工場区、安全な居住区もあるが、空間が限定されていて一万人程度しか収容できない。溢れでた人々は中央施設を中心に半径１５００メートル地点に張り巡らされた対アラガミ装甲壁の内側、外部居住区で粗末な暮らしを送っている。

外部居住区で暮らすよりはまともな住まい、食べ物、衣服。

だがアラガミの出現により圧迫された生活は時が進むにつれさらに貧窮を極めていく。

品種を改良したトウモロコシ、といえば聞こえがいいが、実際はただ大きくしただけの食べにくいトウモロコシだ。人々を守護する立場のゴッドイーターですらこの食事。外部居住区の住民の食事など推して知るべしだ。

――早く母さんとノゾミに腹いっぱい食わしてやりたいな。俺そのためにゴッドイーターになったんだし。決めたんだ、なにをしても絶対に守るって。父さんの代わりに、俺がふたりを守っていく。うん。ツバキ教官から譲り受けたモウスィブロウでアラガミなんてぶっ飛ばしてやる！　そういやツバキ教官が言ってたな……えぇっと、バースト時の攻撃力がどうのこうの……あー、とりあえず、素質はあるって言ってた！　いよっしゃー！　あのツバキ教官が言うんだから俺ってバーストすりゃ最強じゃね！？　でも遠距離式神機使いだからひとりでバーストできないんだよなー。　ふふん。だ・け・ど、ナハトがいるし！　新型神機使いならアラガミバレットを受け渡し弾に変換して仲間をバースト状態にできるもんねー！　あー早くこいつと組んで戦いたい！　俺もリンクバーストで炎上した

い！　ジュババババbって目にも留まらぬ連撃でアラガミ蜂の巣にしてさ！　最後はレベル3最高威力のアラガミバレット発射してキメるんだぜ！！　アラガミなんてブイブイ言わせてやるよ！　新兵同士なんだからもうちょっと先輩と実践を学んでから、なんて言わずに共闘させてくれればいいのにー！　てかリンドウさんなら新兵ふたりくらい見てられるっしょ！？　そうだよ共同実践訓練すりゃいいんだよ！　俺たちふたりの活躍みて腰抜かすぜきっと――

「……さっきから脳内妄想だだ漏れなんだけどさ、頭はへいきか？

飯食う前に医務室いく？」

「うヴぉあああああああっ！！？？　いぃぃぃ、いつから！？

ねぇいつから？！」

「早く母さんとノゾミに腹いっぱい食わしてやりたいな。から」

「原初の始まりからあああああああああああぁぁぁぁぁぁァァ！！？」

自分でも意味不明な叫びをあげながら今度こそがっくりと膝をつく。

恥ずかしい。これは恥ずかしい。もうまともにこいつの顔見れない。リンクバースト・レベル3の夢も潰えたかもしれない。あわよくば最強コンビを名乗ろうと思ってたけどもう無理かも。兄ちゃんが地球を守る！　ってノゾミに宣言したかったけど、それももしかしたら――

「大丈夫だから」

「え？」

ずーんと淀んだ空気を背負っていたコウタはその声に顔を上げた。ナハトと目が合う。そして面倒くさそうに差し出された手を取ると、

「……オレも楽しみにしてるってこと。あんたとの共闘」

ぽつりとナハトが言った。恥ずかしそうに逸らされた目が、それは本心だと物語っている。

コウタの涙腺と鼻腺が結合崩壊した。

「ナ、ナハトォォ……！　うぐっずびっ。やっぱアンタ最高の――」

「だから恥ずかしがらずにこっちの顔見てもいいしリンクバーストもレベル3にするし最強コンビ名乗って妹さんに宣言してもいいからさ、ちょっとその口閉じようぜ？」
「また口に出してたあああぁぁ！！？　ってかいつもより饒舌だね？！　熱でもあるの！？」
ぎゃいぎゃいと騒いでいるうちにようやくエレベーターのドアが開き、少し混雑した食堂が目に飛び込んでくる。食欲をそそる匂いが鼻腔をくすぐり、腹がぐぅと切なげな音を出した。
配給を受け取り適当に空いてる席を見つけて座る。
「細いんだからいっぱい食べなよー？　いっただきまーす」
「んー？　これでも食ってんだけどな。いただきます」
そうして昨日の作戦や狙撃兵らしくバレットエディットの話で花を咲かせていると、
「あ……」
ふいにナハトがスプーンを握ったままある方向に釘付になった。
「ふお？　どした？」
コウタはナハトが見据える先に視線をやった。青いコートに付いたフードで頭をすっぽりと隠した青年がちょうど席を立ったところだった。その瞬間、彼のいる一帯にわずかに緊張が走ったように見える。
ああ、たしかあいつは。
「ん、ああ。……なんでもない」
コウタが口にだす前に、ナハトがピラフを口に運び出した。
これでこの話はお終いとばかりに伏せられた目が、すこし悲しそうに揺れている。
あいつ……ソーマとナハトが初の合同任務のときに、同行していた神機使いが亡くなったんだった。
「だいじょーぶ。大丈夫だって」
知らずのうちにそんなセリフが口から出ていた。
コウタは照れ隠しにニカッと笑い、

「死んじまったやつの分も、俺達が頑張ればなんとかなるっしょ。そんためには生きる！　生きるためにまず食う！　ほーら、もりもり食べなよ！」
余計なこと言ったかな、と言った後でひやりとしていると、驚いて目を丸くしていたナハトが、やがてふと目を細めた。すこし緊張の糸がほぐれたような、そんな微笑だった。
「じゃあそのスープ少しちょーだい」
そういって手を伸ばしてくるナハトから「こらー！　人の好物取るなー！」と寸でのところでトマトスープを退避させる。
まるで子供のような行動にふたりで吹き出し、コウタは頬を緩ませたまま料理を平らげた。
そのとき、ふたりの携帯端末のブザーが同時に鳴った。
ちょうどスプーンをトレーの上に戻して「ごちそうさまでした」をした直後だった。
コウタはナハトと顔を見合わせ、ゆっくりと頷いた。乾いた喉がごくりと鳴る。
彼も同じように全身に緊張感を湛えていた。

――どこかでまた別な、血と本能と死臭に満ちた「いただきます」が始まる。

空になった食器を載せたトレーをそのままに、ふたりは矢の如く走りだした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１　コウタ（後書き）

少しは世界観とか伝わったでしょうか？
改稿前だとコウタと仲良くさせすぎた感じだったので別な展開で、
あんまりテンポを落とさずに、を心がけたつもりです。

１０／１１　今更だけど誤字修正と描写の追加をしましたｏｒｚ
誤字脱字などありましたら教えて下さい。
感想くれると飛んで跳ねて月に行ってまた戻ってきます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２　カウボーイ

突然の知らせから数十分後。
ナハトはヘリに乗りアラガミの出現ポイント、【嘆きの平原】に向かっていた。
広くはないヘリの中、できる限りのウォーミングアップをして体をほぐす。
やはり少し早めに起きて朝の訓練に出るべきだった。なんて先にも立たない後悔をしつつ、教官の雨宮ツバキから伝えられた今回のターゲットの情報を思い起こす。
鬼の顔のような模様の尾と巨大な牙を持つ二足歩行の小型アラガミ【オウガテイル】４体。分断して一体ずつ処理してしまえばさほど難しい相手ではない。ただしそれに、
「【ヴァジュラ】か……」
付近にヴァジュラ１体の目撃情報。ナハトが戦うにはまだまだ早い相手だ。
狙撃兵の制服の腰に付けたポシェットから持ち込んだものを取り出す。
スタングレネード。
整備班のリッカから「必ず生きて帰ってきてね」と渡されたものだ。
このミッションはヴァジュラを相手にせずオウガテイルだけを討伐するという内容のもの。万が一ヴァジュラに捕捉されてしまったら、このスタングレネードでアラガミの聴力奪い視界を焼いてとにかく逃げること。絶対に相手をしてはならない。相手をして馬鹿をみるのは、ナハトの方なのだ。
この新兵には過酷すぎるミッションに、ナハトはひとりで挑まなければならなかった。
たんに人員が足りないせいだ。

所属する第一部隊の隊長、雨宮リンドウは雪がふり積もる鎮魂の廃寺で単独任務。スナイパー型の旧型遠距離式神機を扱う衛生兵で第一部隊サブリーダーの橘サクヤ、そしてさきほど朝食を共にしたアサルト型の旧型遠距離式神機の適合者のコウタも居住区防衛戦に駆り出され、先日顔を会わせたソーマという旧型近距離式神機使いは極東支部支部長から特別任務の要請を受け、すでにそちらに向かった後だった。

とても心細い状況ではあるが、負けていられないと気を奮い立たせる。

普通だったら待機させられるところをこうして作戦に送り出されたのだ。多少なりとも期待されている。死なない程度に頑張らねばならない。

「見えてきました！」

ヘリの操縦者が緊張を拭えていない声を張り上げた。

スタングレネードをポシェットに戻し窓に顔を寄せて先を見ると、人々の暮らしの残骸を押し退けた形で平原が広がっていた。しかし、その中央部はまるで隕石が衝突したように抉り取られてしまっている。そのクレーターの上には消えることのない竜巻が発生し、その影響かこの一帯は常に厚い雲に覆われ、コケ類や菌類が多く繁殖している。

活動範囲に高低さがない嘆きの平原は、真っ向からアラガミと対峙しなければならない。

ケースにしまわれた収納形態の神機を取り出す。きれいに折り畳まれコンパクトな状態だ。

ナハトは神機の柄の部分を両手で握り、念じた。

接続。

右手に装着された赤い腕輪の接続口に神機の中枢パーツから伸びた黒い触手が突き刺さる。一瞬だけちくりとするが、いまさら驚いたりしない。先ほどまで感じていた神機の重さがまったくなくなり、体は軽く頭もクリアになる。視覚を除いた五感が研ぎすまされ、操

縦席の男の息づかいまではっきりと聞こえる。
ナハトはこの、神機が体の一部になる瞬間があまり好きではなかった。
力を手に入れた瞬間、自分が自分でなくなるような、眠っている何かが起き出すような、そんな感覚がするのだ。正直怖いとさえ思う。
脆弱な人間が扱うには、この力は強大すぎる。
「……展開」
畏れを吹き飛ばそうとしっかりと声を出して念じた。
瞬間、ふたつに分割され重なっていた刀身がスライドして固定、中枢パーツの黒い触手に運ばれ折り畳まれた銃身が腹に回され、入れ替えになる形で装甲パーツが刀身の両サイドに分割された形で設置される。
強化を終えたばかりのロングブレードと５０型機関砲に、新しく作ってもらった汎用シールド。制御ユニットにはウォーリアーという、バースト時に剣攻撃力と防御力が格段に強化されるプログラムを積んでいる。ソロの作戦時は衛生兵としてではなく攻撃に特化した強襲兵として任務にあたる。敵に与えるダメージの効率を考えてのことだ。
神機は体内の【Ｐ５３偏食因子】を媒介し、腕輪を通して中枢パーツに搭載された【アーティフィシャルＣＮＳ】に指示することによって変形できる。ナハトが適合した新型神機は銃形態・剣形態・盾形態と状況に応じてさまざまな対応が可能だが、欠点をいえば、銃形態時には装甲を展開できない。それに加え変型機構を持ったことで中枢パーツの触手が摩擦して消耗が早いということ。整備はまめに行わなければならない。
ナハトは彼の背丈に近いもとのサイズになった神機を背負って「まぁ、頼りにしてるけどな」と小さく独りごちた。
「目標に接近！」
「ちょっと行ってくる」

操縦者の声とナハトのやる気のない――聞きようによっては落ち着いた声が被さった。
ヘリの扉がスライドして開き強い風がなだれ込んでくる。
ナハトは今にも雨が降り出しそうな空へとその身を投げ出した。
重力に逆らわずそのまま自由落下。その直下には討伐対象のオウガテイル3体。
そのうちの中央に位置する1体に狙いを定め、神機に許可を下す。
喰っていいぜ、と。
ガパァッと刀身と銃身を支える中枢パーツから大きな黒い口のようなものが現れた。どんどん発達し巨大な顎（アギト）を形成しつつ、獲物を飲み込みやすいようにと刀身が収納される。
捕食形態へと姿を変えた神機を目下数メートルと迫った獲物に向け、
「頭上の注意も怠ったちゃダメです……よ！　っと」
白い毛に覆われた背に、神機の顎から着地。その衝撃を殺さず顎から生えた鋭い牙をさらにオウガテイルの肉に食い込ませ、力任せに引き抜く。
「……さっさと帰りてぇ」
呟くがいなや、ナハトを中心に黒い霧が足下から巻き起こる。そして、生命力を表したかのように暖かで、それでいて獰猛な光が体の内側から溢れ出した。
【バースト】――神機解放モードとも呼ばれている。
アラガミを捕食することでエネルギーを奪取し、使用者の身体能力を飛躍的に上昇させる。攻撃能力、自己回復力、移動距離やスピードの強化、そして空中ジャンプという人並み外れた行動が可能となる。中枢パーツに搭載された制御ユニットが起動し、剣攻撃と防御力が普段の数倍備わったことを体のどこかで知覚する。
背を喰いちぎられたオウガテイルが咽喉を引き絞ったような断末魔をあげた。彼に感情があるとすれば、なにが起きたかわからないといった表情だと推測する。

ようやく仲間の異変に気づいた別の個体が左右に飛びすさり、突然の破壊者の訪れに牙を剥く。
事切れたオウガテイルの背を蹴って跳躍し、左の個体へとロングブレードを振りかぶる。巨大な尾を使った回転攻撃を喰らう前にすれ違いざまその首をはね、返す刀で背後まで迫った個体を薙ぎ払う。
「――っ！」
ほとんど勘を頼りに右へとステップしてその場から逃れ、攻撃があった方向へ向き直る。ナハトがほんの一瞬までいた空間を幾分の針が通過した。
間髪入れずオウガテイルが発達した両足をバネにして飛び込んでくる。
ナハトは獲物の着地予想地点から最小限の距離をバックステップで取り、剣先を天に向けてその瞬間を待った。
グガァウッと捕食対象を噛みちぎる素振りをしながらナハトがもと居た位置にオウガテイルが降着。その瞬間を逃さず、
「邪魔ぁ！」
刀身の刃の部分を下段からオウガテイルの胴に叩き込んだ。それはアラガミが出現する前、盛んに行われていた球技、野球のバットを振る動作に似ていた。
あとはもう簡単だった。
戦闘不能に陥った3体とすでに絶命した1体から順々に捕食形態でその体を喰らっていく。
これは忘れてはならない、重大な任務のひとつだ。
ゴッドイーターとしての役割の中に、コアの回収がある。
コア――正式名称【オラクルＣＮＳ】。
オラクル細胞の群体としてのアラガミを制御する指令細胞群のことで、1体のアラガミにつき1つのコアが必ず存在する。無傷で取り出すことができれば神機の中枢パーツとして利用でき、傷が付いていたとしても各種兵装の生産、外部居住区を守る対アラガミ装甲壁の強化など、産業的価値が非常に高いのだ。

神機がオウガティル４体すべてを咀嚼し嚥下し終わって、ようやく任務が完了する。
体から黒い霧を吹き出していたそれらが地面に溶けるようにその体を霧散させると同時にナハトのバースト状態も解け、体の内側から発していた光が消えた。
周囲の警戒を怠らず、ポシェットの携帯端末へと手を伸ばした。回収班を呼びアナグラに帰投するためだ。
知らず知らずのうちに手に汗をかいていた。
強敵ヴァジュラに隠れての討伐は精神的にくるものがあった。向こうにこちらが捕捉されていなくても、姿を見たり声を聞いたりしたら焦ってここまでうまくいかなかったかもしれない。
「……アイツは無事かな」
ふと居住区防衛戦に出撃したコウタの安否が気になった。しかし、先輩隊員のサクヤがついていれば大きな怪我なんてしないだろうと思い直して安堵する。
夕食にでも戦果を報告しあえたら、と思ったところで今日の配給がジャイアント・トウモロコシだと思い出して少しテンションが沈む。こんなご時世だから食べれるだけでも有り難いのだが、朝食がピラフとトマトスープだっただけに、その落差は残念だった。コウタが妹と母親を案じるあたり、もしかしたら外部居住区の方は目も当てられないようなものが食卓に並んでいるのかもしれない。それを思うと胸にずしりと重たいものを感じる。
「いい調理方法が見つかればな……」
あれだけ巨大なトウモロコシだ。食べやすさとおいしさと量産性を追求した調理ができれば、中央施設に住まうゴッドイーターや職員だけではなく外部居住区の住民も満足な食事ができるかもしれない。
ポチポチと指で小さなボタンを押し、まだ十数件ほどしか登録されていない番号を眺めていると、背後になにものかの気配。
「ッ！？」

ナハトは驚きに目を見開いて後ろを振り返った。

その視線の先、黒い卵殻に女体を融合させたようなアラガミ――【ザイゴート】が、大きな一つ目でナハトを捕捉、獲物を見つけ歓喜の声をあげる姿があった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２　カウボーイ（後書き）

原作をプレイ済みの方は、サイゴードが出てきた時点で次の展開が読めたかもしれませんね。

ナハト装備
刀身パーツ：ブレード　改（スタミナ→小）
銃身パーツ：５０型機関砲　改（体力→小、スタミナ→小）
装甲パーツ：汎用シールド（器用、捕喰吸収量→）
制御ユニット：ウォーリアー（剣攻撃→、被ダメージ減少）

スタミナ→小が被るのがもったいないけど、しょーがないね

追記９／１　１８：１５頃…ご指摘がありました誤字を訂正、新型は旧型に比べ防御力に若干不安が残る～の記述を差し替え。
訂正
○ザイゴート
×サイゴード
○アーティフィシャル
×アーティフィナル
ご指摘有難うございました！助かります！

追記の追記　すんすん…ザイゴートだったｏｒｚ
訂正しました

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３　一難去ってまた一難ぶっちゃけありえねぇ

――まずい！

ナハトは浮遊する【ザイゴート】へと駆けだした。その距離およそ３００メートル。

このアラガミは周囲のアラガミを呼び寄せるという性質を持つため、早めに倒しておかないとやっかいなことになる。

捕食対象であるナハトに向け、ザイゴートも卵を前のめりにした形で動き出した。

この飛行能力はオラクル細胞によって変質したガスを体内に充満させ浮力を得ていると推測されている。ガスは人体に有毒で、攻撃手段にも用いられる。加えて広範囲の索敵能力に優れ、卵殻にある大きな眼球は、遮蔽物でもなければどんなに離れていても敵を発見するという面倒なものだ。

ザイゴートは大型のアラガミと共闘することで真価を発揮するタイプ、とメディカルチェックと講義で世話になっているペイラー・榊博士が言っていた。

大型のアラガミ、このミッションでいうヴァジュラなど呼び寄せられたら面倒だけじゃ済まされない。機動力と強靭さを併せ持つヴァジュラと他のアラガミのサポートが得意なザイゴートを同時相手に立ち回るなど、ベテランの神機使いでもなかなか骨の折れる仕事だ。

無論、新兵であるナハトにそんな器用な芸当ができるはずもない。

全速力で走って、敵との距離はおおよそ５０メートルにまで縮んだ。

近付くにつれザイゴートの形態が明らかになる。それは女性が卵殻に頭から食われ悲鳴を上げている様をそのままアラガミにしたような姿だった。女体が広げた両腕は小さな翼手となり、下肢は人魚

のように融合して、その先に小振りな尾を広げていた。
ナハトは立ち止まらずに腕輪、正式名称【Ｐ５３アームドインプラント】を介して神経信号を神機に伝達させ、銃形態を展開する。
突進してくるザイゴートと正面衝突する寸前で横っ飛びにかわし、背後を振り返りざま大雑把に照準を合わせ、
「呼んでねぇよバカ」
トリガーを引く。
銃口から高エネルギーの球体が出現――ほんの一瞬だけ間があって、そこから2発の銃弾がザイゴート目掛け発射される。その弾丸は炎を纏い、2発とも迷うことなく卵殻に吸い込まれた。ヒットした瞬間、卵殻のなかで新しい2発が生み出され、内側からザイゴートの体表を突き破る。
放った弾丸はバレットエディットで構成した【連弾】というもので、新米の遠距離式神機使いが最初に作る擬似ホーミング弾だ。弾種はダメージ効率を考え選ばれたもので、鍛えられた銃ならば大ダメージを図ることもできる。そして最初に出現する球体は弾道制御を担っているため、細かに照準を合わせずに済む。その利点から初心者からベテランにまで使われている逸品だ。
風穴を開けられたザイゴートが人ならざる声で悲鳴をあげて墜落する。ナハトはその隙にさらに連弾を撃ち込み、弾切れを起こしたところで銃形態から剣形態に切り替え捕食を行った。
生きたままコアを抜き取られたザイゴートが、ぎょろぎょろと動かしていた目を虚ろに瞬かせ、やがて眠りにつくようにゆっくりと目蓋をおろした。
「っはぁ、……はぁ……」
神機を地に刺し杖にして、ナハトは肩で息を吐いた。忙しない呼吸を整えようと必死に空気を吸い込むが、肺にまで行き渡った気がしない。それどころか膝が笑い始めた。
ヴァジュラがいる場所で膝をつくわけにはいかないと必死に耐えるが、意に反して全身が力を失った。神機の柄を握りしめたまま座

り込んでしまう。
「だいたい……昨日だって……くそ」
荒い息の合間に悪態をついた。
昨日のミッションで討ち取ったのはコクーンメイデン2体にザイゴート1体。
だが、その作戦は本来ならばザイゴート1体だけが討伐対象だった。
贖罪の街というエリアで小型アラガミ1体の討伐作戦。ちょっとは使い物になってきた新兵が単独で挑戦するにうってつけの任務だ。崩れかけてもいまだに重厚な雰囲気を保つ建物の角を覗くと、ナハトに背を向けて浮遊するザイゴートがいた。発見される前に地に落としてしまおうと銃口を向けた時だった。ナハトの背後で突如コクーンメイデン2体が出現したのだ。いきなり地面から生えてきたと言っていい。コクーンメイデンに捕捉されたことでザイゴートにも気づかれた。3体の攻撃をなんとかかわして、移動能力がなくその場から動けないコクーンメイデンの攻撃範囲外までザイゴートを誘い込み、叩き落としてコアまでめった刺しにした。残りのコクーンメイデンは遠距離攻撃で攻めたあと、気を失った片方を盾にしつつ剣形態で切り裂いた。こちらの方は、1体はコアに傷を付けてしまったが、もう1体は無傷で取り出すことができた。
コクーンメイデンの体内に潜む無数の針に少しふとももを裂かれたが、幸い怪我はそれだけで済んだ。
イレギュラーの事態に対する見舞金なのか、多少報酬を上乗せしてくれた。神機の強化素材であるマナ石片をそれとなくねだってみたら貰えたのも良かった。
だが、2日続けてのイレギュラー。しかもヴァジュラを呼び寄せるような性質のアラガミの出現に心がくすぶる。なんとか生還できそうだからよかったものの、死んだらせっかく強化した神機も手に入れた素材も意味がなくなる。それに目的だってすこしも達成できていない。

「……まだ、死ぬわけにはいかない」
ようやく穏やかになった息に乗せて呟く。
立ち上がって周囲を見渡した。曇天からは時間が読めないが、おそらく〇九〇〇くらいか。
今度こそ回収班に連絡を、と思いポケットのなかを探る。
「……あれ？」
ナハトはじゃっかん間の抜けた声を出した。
胸ポケット、背中の備品入れ、下衣のポケット、腰のポシェット。どこを探しても携帯端末が見つからない。
不思議に思って周囲を見渡す。近場にはないようだ。
全力で駆け抜けた道中に落としてしまっただろうと結論付け、神機を油断なく構えながらそろりそろりと来た道を引き返す。
思った以上に力強く地を踏み抜いたのか、ところどころ苔がめくれ上がっている。それを目印に左右前後に目を配らせながら進むと、１００メートルほど返した地点だろうか。黒く光る端末を見つけた。現在地からは３０メートルほど離れている。
焦ってはいけない。物音を立てたり目立った動きをしたりしてヴァジュラに発覚されたらザイゴートを倒した意味がなくなる。
そう自分に言い聞かせ、ナハトは慎重に足を運ばせた。
乾いたばかりの手のひらが汗で濡れ始める。緊張のしすぎか体がぎこちない動きをし、思うように足が動かない。瞬きを忘れた目が乾く。息を殺しているはずなのに、呼吸音がどこかに潜んでいるヴァジュラに届いてしまうのではないかと思うほど大きく感じる。
残りおよそ１３メートル、という距離だった。
ナハトの左側に位置する盛り上がった地の中心部、アラガミに捕食されたことで生まれたクレーターから、死を招く獣の咆哮が響きわたった。
びくりと肩が跳ねた。
時が止まってしまったように体が動かなくなる。
指一本ぴくりともしない。

呼吸も止まった。
程なくしてどこかで大きな獣が地を蹴って高いところに登った音がする。
ナハトはほっぽりだされた携帯端末を拾い上げようと弾かれたように走り出した。
だが、獣の方が早かった。
竜巻をものともせず潜り抜け、それはナハトの目の前に降りたった。
着地の衝撃で大地がめり込み、周りの空気が帯電する。獰猛な肉食獣を思わせる呼気に、恐怖と絶望しか与えない様相。
ゆっくりと地を踏みしめて獣がナハトを振り返る。人の胴以上の太さの４本足を使って器用に方向転換する姿は猫科のそれに似ていた。
獣の足下から合成樹脂に包まれた小型精密機械がひしゃげた音がする。
ああ、ぶっ壊れたな。リンドウさんに連絡が取れない。
のんきにそんなことを考えた。
目の前、わずか3メートル先にこんなのがいる現実なんて見たくもない。
「……逃がしてくれたっていいじゃねぇか」
神機を構えることもできず、呆然と相手を正面から見上げる。ようやく絞り出した声はカラカラに乾いていたあげく、まったく感情がこもっていなかった。
神に抗うゴッドイーターからなんの抵抗力も持たない非力な青年になったナハトを見、ヴァジュラは鋭い牙を誇示するように口を開き咆哮を轟かせた。

「ふい～ただいまっと」

出撃ゲートを通ってエントランス2階へと歩みながら、紫煙をくゆらせ気だるげに帰還を告げる。
第一部隊隊長、雨宮リンドウは装甲車の揺れと極寒の地での任務のせいで少し凝ってしまった体をほぐそうと両肩と首を回した。
リンドウは猿に似たアラガミ、コンゴウ2体の討伐が任務だった。鎮魂の廃寺は音が届きやすいエリアのため、複数討伐の場合、分断してもすぐ敵に合流されてしまう。最初からあきらめてまとめて相手をしていたのだが、これといって苦戦することもなく順調に任務を遂げた。
本当ならのんびり素材回収でもしたいところだが、散り散りに任務に向かった隊員たちに示しがつかないやら心配やらで早めに帰ってきたのだ。
新兵でも、コウタにはサクヤが付いてるし、ソーマは……まぁ、怪我は多少するかもしれないが、腕が立つから大丈夫だろ。問題は……。
「おう、リンドウさん。お疲れ！」
思案にふけっていたところに、赤いジャケットと白いスラックスに身を包んだ若い男が親しみやすい笑顔を携えて近寄ってくる。リンドウも精悍な顔に笑みを浮かべた。
「よぉタツミ。お疲れさん。外部居住区の方はどうだ？」
大森タツミ。第二部隊隊長で防衛班の任務に就いている。旧型近距離式神機使いで、ショートブレードの扱いに長ける彼は手数の多さと素早さを売りにしている。その的確な指示で極東支部の被害を最小限に押さえるディフェンダーだ。
２３歳になるが幼い顔のせいで実年齢よりも若く見られるのが悩みだと聞いたことがある。
リンドウの問いに、タツミは聞いてほしかったとばかりに目を輝かせた。
「ああ、かなりうまくいって被害が出る前に追い払えたぜ。コウタが張り切っててなー、アラガミが裸足で逃げ出すんじゃないかって

思ったほどだった」
そいつはよかった、とリンドウはにんまりした。
自分が面倒をみている者がほめられて嬉しくない者などいないだろう。
「サクヤさんの支援はいつ見ても惚れ惚れするしな……っと、ヒバリちゃーん！　俺はヒバリちゃん一筋だぜ！」
「もう！　黙っててください！」
タツミがサクヤをほめた後、階下にいるオペレーターの竹田ヒバリに弁解するように叫ぶ。間髪入れずヒバリのよく通る声が返ってきた。
タツミがわずかに顔をしかめる。
「ヒバリちゃん、どうかしたのか？」
タツミは人目をはばからず意中の彼女をデートに誘い、その度に断られている。なんど拒否されてもあきらめない彼だからこそ、大好きなヒバリの声のトーンがいつもと違うことに気が付いたのだろう。
トントンと軽快な音をたて階段を下りるタツミに続きリンドウも1階に向かうと、
「リンドウ！」「リンドウさん！」
受付でヒバリと顔を突き合わせていたサクヤとコウタが揃って駆け寄ってくる。2人の表情によくないものを感じるが、あえてリンドウはいつもの調子で訊いた。
「ようお疲れ。どうしたお前ら、元気ないぞ」
「のんびりしてる場合じゃないんですって！」
精一杯の敬語を駆使しながらコウタが今にも掴みかかりそうな勢いで詰め寄る。その慌てっぷりとコウタの友人である青年がこの場にいないことでだいたいの状況は把握できた。
嫌な予感が的中し、顔をしかめる。
「ナハトがまだ帰らないか……」
唸るように呟いたリンドウになにかを感じたのか、コウタが視線

を落とし声を震わせた。
「アイツ、嘆きの平原にオウガテイル４体を倒しに行ったんですよね？　ナハトならすぐに片付けて帰ってこれるはずなのに……なんで」
サクヤがその言葉に目をそむけ、一心に端末を繰っていたヒバリも手を止める。
リンドウは煙草の煙を肺いっぱいに吸い込んだ。
コウタにはナハトが受けるミッション『カウボーイ』の内容を正しく伝えていなかった。討伐対象ではないとはいえ、難敵ヴァジュラが近くにいるエリアでの任務だ。大型アラガミに対する訓練もまだ行っていない状況でそんなところに友人がひとりで赴くとなったら、コウタの動揺は大変なものだろうと予測して伝えなかったのだ。戦闘は個人の力はもちろん、チームプレイも大切だ。ひとりがペースを乱せば思わぬ惨事が発生する可能性もある。下手をしたら心に隙が生まれコウタ自身が怪我をするかもしれない。
ではなぜ危険な任務に新兵のナハトを送り込まねばならなかったかといえば、アラガミが他のアラガミを発生させる危険性があるからだ。他の支部でたった１体のコクーンメイデンを放置したところ、堕天種を含めたコクーンメイデン神種が異常発生したなどの報告がされている。小型のアラガミといえど集まればそれだけ危険が増す。そのため脅威になりえないものでも１体出現すればすぐに討伐に向かわねばならないのだ。
長いこと肺に溜めこんだ煙を吐き出し、
「ナハトなら大丈夫だ。あいつは俺の見込み通り逃げ足が速いからな」
うな垂れるコウタの頭をポンポンと優しく叩いた。こちらの顔を見上げてくる彼にニッと笑顔で応えた後、リンドウはヒバリに目配せをする。ヒバリは「はい」と頷き、嘆きの平原エリアにおけるアラガミのコア反応、神機使いの腕輪に備えられた生体反応の解析を続行する。と、

「嘆きの平原エリアにザイゴートのコア反応？」
「なんですって」
サクヤが目を見開いた。無理もない。ナハトにとって2日続けてのイレギュラー事態だ。
「……偵察班はなにやってんだよ！　ザイゴートみたいな地味にうっとうしい奴見逃すなんて！　それに昨日も――」
憤慨するコウタの肩に手を置き、リンドウは「交戦中か？」とヒバリの目を見る。
「いえ、たった今コア反応が消失しました。ですが……」
言葉の先は言われなくてもわかった。ザイゴートの性質上、エリアに潜むヴァジュラにナハトの存在を知らせた可能性がある。
サクヤがリンドウの名を呼んだ。憂いを気丈な態度で隠した彼女の目を見返し、
「おっし。あいつにナハトの様子を見に行かせるか」
「……そうね。彼ならナハトくんのいるエリアに近いからすぐに駆けつけられるものね」
「あいつって、誰ですか？」
多少表情を和らげたサクヤにコウタが問う。彼女は目を細め、小さく笑った。
「彼はね、本当は優しいコだから……最初は駄々をこねて行きたがらなくても、絶対ナハトくんを助けてくれるわ」
シンプルなデザインの携帯端末を長い指で不器用に扱い、ショートカット機能で目的の人物のアドレスを開いてコールをかける。端末を耳に当て、いまだ顔中にクエスチョンマークを貼り付けているコウタにウィンクを送った。ますます困惑する彼を尻目に、リンドウは呼び出し音を2回聞いた。
連絡を取るために、と無理やり押しつけられた携帯端末から一度

も変えたことがない着信音が鳴った。
帰還しようと乗り込んだヘリの中、コートのポケットに突っ込んでいたそれを取り出し着信画面を見る。表示された相手の名前を見て、小さく舌打ちをしてから通話ボタンを押した。
「俺だ……」
『よぉお疲れさん！　お前に頼みたいことがあるんだ。今から嘆きの平原に行って、ちょっくらナハトの様子を見てきてくれ。あ、本当に見てるだけってんじゃ駄目だぞ。困ってたらちゃんと手を貸すよう……』
「おい待て」
通信がつながってすぐ機関銃のように捲し立てるリンドウに軽く苛立ちながら制止をかける。
「なんで俺があの新兵のところに行かなきゃならねぇんだ」
『お？！　名前聞いただけで誰だかわかったか。人のこと覚える気がないお前が……偉いぞ』
「……いいから黙れ。理由だけ答えろ」
不機嫌を隠しもせず催促する。いつでも飛びたてるよう準備をしていた操縦者が怯えたように肩を震わせたが知ったことじゃない。
『ナハトが向かったミッションだが……』受話器越しにリンドウの気配が変わるのがわかった。まれに見る真剣な表情を思い出し、忙しない男だと心中で毒づく。
『オウガテイル４体が討伐対象だが、付近にヴァジュラがいる』
一瞬頬の筋肉が引きつった。
実戦に出たばかりの新兵など待機させておいて、部隊員が集結した後にヴァジュラ共々オウガテイルを叩けばよいものを。
そう思ったが口には出さなかった。今更どうこう言ったって仕方がないからだ。
『そんでな、またイレギュラーが発生してザイゴートまでいやがったんだ。……ナハトがヴァジュラに察知されたかもしれない。助けてやってくれ。ソーマ』

――リンドウさん、それって……！　ヴァジュラがいるってどういうことだよ！？

リンドウとは別の若い男の声が受話器を通して聞こえてくる。動揺しているのか声が掠れ、ところどころ裏返っていた。

「……チッ……到着するまでに、奴がくたばってなかったらな」

ソーマは一方的に通話を切った。

用件はもう聞き出したのだから、リンドウと男のやり取りを聞いていても時間の無駄だ。操縦者に向き直り「目的地は嘆きの平原だ。……急げ」と端的に告げる。

固いシートに腰を下ろし、抜身のバスターソード型神機を隣に投げ出す。

ヘリのプロペラが回りはじめ、程なくして離陸する。ふと窓ガラスに映った自分の顔を見て、すぐに目をそらした。

自分の持つ浅黒い肌と銀色に近い灰色の髪。

嘆きの平原で救援を待っているであろうナハトの、白すぎる肌と黒い髪。

リンドウが「お前と対になってるような色の奴が入ってきたぞ」とナハトのことを話していたから、少しだけ印象に残っていただけだ。

誰が好きであんなお節介野郎の名前など覚えておくか。

そこまで考えて、あの日――ナハトと初めて顔を合わせた時のことが脳裏に過ぎった。

ミッション『鉄の雨』。つい数分前までソーマがいた鉄塔の森が任務地で、コクーンメイデンとオウガテイルの2体ずつが討伐対象だった。ソーマとナハト、加えてエリック・デア＝フォーゲルヴァイデというブラスト型の旧型神機使いが作戦に参加していた。だが、小型アラガミの討伐任務ということで油断をしていたのか、オウガテイル1体の急襲を受け、エリックが命を落とした。ソーマとナハトでオウガテイルを薙ぎ払ったが、エリックは頭部を破壊され、も

はや手の施しようのない状態だった。
形だけの挨拶を済ませたところで討伐対象が一斉に現れた。ソーマは鬱憤を晴らすように、勢いにまかせ無茶な戦い方をした。普段ならかすりもしない攻撃を受けて吹っ飛ばされそうになるが、歯を食いしばって耐え、アラガミを一刀のもと両断する。瞬く間にオウガテイル2体をコアごと叩き斬って、倉庫の上に生えたコクーンメイデン1体に襲いかかった。なんの抵抗もできずに叩き潰され死んでいくコクーンメイデンを横目に、最後の獲物に振り向きざま飛びかかろうとした時だった。
体がなにか温かいものに包まれた。
毒気を抜かれ周囲を見渡すと、事切れた最後の1体から少し離れたところで、こちらに無表情で銃口を向けるナハトがいた。
回復弾を撃たれた、と理解するのに数秒かかった。
その時は「余計な真似を」と礼も言わず足早に回収地点に向かったのだが、ナハトのお節介は始まったばかりだった。
帰りのヘリの中、お互い距離を取るようにシートに身を預けていたのだが、おもむろに彼が立ち上がった。あえて無視をきめ窓の外を眺めていると、両手でそっと右手を取られた。思わずその手を振り払い「何しやがる」と凄めば、ナハトも負けじと目を見返してきた。
「さっさと手を出せ」
「……あ？」
「聞こえねぇのか？　早く手を出せって言ってんだよ」
有無を言わさぬ態度に渋々と手を差し出すと、コートと同色の青いグローブに黒い染みが広がっていた。無意識のうちに強く握りしめていたらしい。気付いたとたん、熱を持った鋭い痛みが走った。
ナハトはバックパックから包帯や消毒液、薬品が入ったチューブなどを取り出し、まず自分の手を消毒すると、ソーマのグローブを慎重に取り払った。パックリと裂けてしまった数か所の傷に手当てを施していく。驚くほど手際が良かった。サクヤにも劣らないほど

早く的確な処置にただ目を奪われている間に治療が完了した。取り出した物をバックパックに再び詰めはじめたナハトが小さくため息を吐く。
「言いたいことがあるなら言え」
まったく聞き入れるつもりなど無いだろうと相手に取られかねない声音で促すと（実際聞き流すつもりだった）、ぴくっとナハトの動作が止まる。それも一瞬のことで、素早く中身を片付けると、彼は立ち上がり口を開いた。
「アンタのせいじゃない」
月並みな慰めだった。
だが、射殺さんばかりの視線と、殺気でも含んでいるんじゃないかと疑うほど低い声が鋭利な刃物のように心に突き刺さる。ついでにスタングレネードを不意打ちで発動されたように目と耳が使い物にならなくなった。
スタスタと元の位置に戻っていく彼に気付かず、ソーマはしばらくそのままの姿勢で硬直していた。

今はもう外された白い包帯を思い出して手をさする。
リンドウも色々とやらかすが、ここまで呆気に取られた人物は生まれて初めてだった。あの日からすでに5日経ったが、今でも胸のうちによくわからないものが渦を巻いている。
ソーマはナハトを、リンドウと同じく厄介な人物だと分類し、極力関わらないようにしようと昨日結論を出したところだった。さっそくその決意が試されることになって軽く頭痛がする。
「クソッタレ……」
フードを目深く被り、小さく悪態をついた。
その声は操縦者に聞き取られることもなく、ヘリの駆動音に掻き消された。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３　一難去ってまた一難ぶっちゃけありえねぇ（後書き）

ナハト「くそ……！　膝が笑う……っ」
膝「ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

このネタどっかで見たな…。

あータイトル思いつかなかったｏｒｚ
今回はいつもより文章が長いですな。
お読み頂き有難うございます！

９／１５　誤字脱字修正しました

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４　ヘテロクロミア（前書き）

お待たせしました！
今回１００００字近いので、長くて読みにくい！と感じた方はお申し出ください。
２分割してアップし直します。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４　ヘテロクロミア

大気を震わす咆哮をあげ、呆然と立ち竦むナハトを喰おうとヴァジュラが近距離から飛びかかった。前足と鋭い牙が迫る。

「――ッ！」

自失から立ち直ったナハトはとっさにステップで後方へ逃れた。間一髪ヴァジュラの爪が胸を通過する。獣神が着地すると地面が抉れて土塊がまった。

どっと汗が噴き出す。今まで戦ってきた小型のアラガミとは全く比べものにならない力を感じる。一度でも直撃したら簡単に死んでしまうかもしれない。

第一撃を避けたことに胸を撫で下ろす暇もなく、右前足のフックが横腹を襲った。

「ぐっ！？」

とっさの判断で装甲を展開するものの、ヴァジュラの力はナハトが想像するよりずっと強かった。装甲を殴打されたと同時に体が宙に浮く。わけがわからぬまま吹っ飛び、クレーターを囲む土と岩とアラガミの排泄物が積載した壁に叩きつけられた。そのままべしゃりと地に落ちる。

「かはっ！　っく……！」

背中を強打し息がつまる。げほげほと咳き込んで、血が混じった唾を吐き捨てた。

かろうじて開けた目に飛び込んできたものに愕然とする。今の一撃で汎用シールドが見るも無惨にひしゃげていた。

ギリ、と奥歯を強く噛みしめる。

軋む体に喝を入れ起き上がり、神機を強く握り獣を形取った神を見据える。

ヴァジュラはかつて森林や湿原などに生息した虎とよく似た４足歩行のアラガミで、筋肉質な黒い肢体がベースだった。顔に当たる

部分には象牙色の額当てと肩当てが重なったような装甲と顎を覆う橙色の短い髭があり、2本の長く鋭い牙が口から覗いていた。前足部分には平らな岩を何枚も重ねたような装甲を貼り付け、指先には鉄板くらい簡単に引き裂きそうな爪がある。背中にはマントと見られる赤い帯状のものが6枚広がっており、ノルンのデータベースにはそこから雷球が発せられると記載があった。

実際に対峙すると圧倒されるほどの巨体を持っていた。見れば見るほど威圧感と殺気に気圧され恐怖と絶望しか沸いてこない。

「……っ……！！」

神機をヴァジュラに向かって構えつつも、ナハトは恐怖に押し潰されていた。

息があがり、足がガタガタ震え出す。

対するヴァジュラは精神的にも肉体的にも矮小な獲物の虚勢など取るに足りないと考えているのか、ゆっくりとした動作でナハトと間合いを詰める。ヴァジュラが一歩まえへ踏み出すごとにナハトの足は一歩下がった。だが歩幅の違いからすぐに距離が縮まってしまう。

暴れ回る心臓がピークに達しようとしている。耳の奥で鼓動の音が鳴り響く。目の前の光景が黒ずみ、赤く歪んで、極度の負荷を処理しようとした脳が激しく痛み出す。デタラメなストレスが胃を刺激して吐き気すら催してくる。

――まだ、死ねない。ぜったい。

体を支配する恐怖に打ち勝とうと、ヴァジュラを鋭く睨んだ時だった。

「っ……あ、あぁ、あああああああ！！！？」

なんの前触れもなく左目に激痛が走った。焼け付くような、眼球の中でなにか別の生物が誕生し神経細胞を食い千切っているような、そんな形容しがたい痛みだった。ナハトは接続を解除して神機を手放し膝をついて両手で左目を覆った。手で塞いだところで痛みが和らぐはずもなく、あまりの苦痛に意識すら手放しそうになる。

ヴァジュラが高らかに吠えた。まるでナハトが苦しんでいる様を嘲笑うような遠吠えだった。
ナハトは自身の中でなにかが切れる音を聞いた。左手だけで目を押さえ、右手で放り投げた神機の柄を強く握りしめる。中枢パーツから黒い触手が伸びて腕輪の接続口に刺さった。神機を杖代わりにして立ち上がり、ギッとヴァジュラを睨め上げる。
突如として目の奥がストロボを焚いたように真っ白に染まる。
痛みが消え去った。
塞いでいた左手を神機に回しゆっくりと左目の目蓋をひらく。
双眸で知覚したものは、情報の塊だった。
ヴァジュラの体を白い情報が覆い尽くしている。それはオラクル細胞の結合の強度を示す数値だったり、神機を用いて攻撃した場合どの部位にどのような手段が有効かだったりその個体におけるコアの位置を示していた。それらすべての情報は光の束となって視覚から脳に伝達された。
この目が知らせるところによれば――顔は剣と銃の破砕、前足と尻尾は剣による切断、マントに隠された胴には銃撃による貫通攻撃が有効とされている。
「いける、かな……？」

――初めて遭遇するアラガミを討伐する場合、無理に攻めようとするな。
まずは相手の動きをよく観察して、攻撃の範囲と挙動を見極めろ。
相手を知ることこそが戦いに勝つための要だ。

ツバキの厳しくも暖かい声が思い起こされる。
弱点を知ることはできたが、肉体が力を得たわけではないと神機を通して体感する。
ため息ひとつ。楽観視できる要素がどこにも見当たらない。
ふとナハトはヴァジュラの瞳に映った自分の顔を見た。

左目だけが、妖しい金色の光を放っていた。

ソーマを乗せたヘリは嘆きの平原上空に到達していた。
開いたドアから湿った空気が大量に流れ込んでくる。フードが外れないように左手で押さえつけながら眼下を覗くと、まだ存命しているナハトとマントから雷球を放つヴァジュラが見えた。
「なかなかしぶといな……」
口から出てきた言葉は褒めているとは思えないほど辛辣だった。
「……ん？」
視線を少し上に移動させると、ナハトとヴァジュラの激闘をよそに、水没した街を眺めながら呑気に食事をしている【シユウ】を発見した。このアラガミは鳥と人とを融合したような姿を持ち、肉弾戦とエネルギー弾による攻撃を得意とする。乱戦となるとザイゴート以上に厄介な相手だ。
ナハトにとっては本日2度目のイレギュラーだが、出現したアラガミがシユウで幸いだったと言うべきか。シユウは聴力が弱く、物音を立てても、少し離れた場所ならばこちらの存在に気付かないことがほとんどだ。だが、不安要素はできる限り潰しておいたほうがいい。
「ったく、めんどくせぇ」
呟き、ソーマは操縦士に指示を出した。
目的のポイントに到着するとソーマは地上のシユウ目掛けその身を投げ出した。
自由落下からすぐに体勢を整え、神機に司令を送る。刀身が禍々しい暗い紫の光を帯び始め、ただでさえ巨大なノコギリが倍以上にその長さと重量を増した。
バスターソードが持つ一撃必殺――【チャージクラッシュ】。
圧倒的な殺意に気付き、シユウが上空からの襲撃者を見上げる。

だが、時はすでに遅い。
「目障りだ……消えろ！」
神機を大きく振りかぶり、刀身をシユウの頭に叩きつける。増長したノコギリは脳天から股にかけ歪な切り口を作りながらソーマの身長の倍に近い体を両断した。切断面から大量の血を噴き出し、割れた体が左右対称に倒れる。
「イレギュラーが多すぎるだろ……クソッタレ」
ソーマは片腕一本で神機を一閃させ、付着した血を振り払った。
その瞬間、後方で何かが爆ぜた音がする。地が揺れるほどの大音量だった。
――やられたか？
驚いてバッと勢い良く振り返ると、ヴァジュラが大きく後方へ飛び上がりながら雷球を地に叩きつけたところだった。ナハトはというと、ヴァジュラを追うようにしてステップで前方へ逃れていたため無事だった。彼がヴァジュラの着地の瞬間を狙って前足を斬りつける。鮮血が飛び散り、獣の苦鳴が響いた。
と、そこでソーマは目を見開いた。
「……は？」
思わず気の抜けた声を出す。ゴッドイーター最高峰の身体能力を持つソーマは、常人よりもずっと優れた視力でその事実を見た。
――ヴァジュラの前足と尻尾が結合崩壊している？
上空からは確認できなかったが、尻尾が途切れていた。さらに前足は岩の装甲が砕かれ、普段は隠されて見えない縞模様の毛が漏出していた。顔部分に施された額当てのような装甲にはいくつかの弾痕があり、爆発物でもぶつけられたのかところどころ剥がれてしまっている。本格的な結合崩壊も間近といった様子だ。
よくよく見れば、肌を刺すような咆哮を上げつつもヴァジュラは息を切らせている。全身をバネにナハトに飛びかかるが、攻撃は当たらず逆に擦れ違いざま前足を斬られるといった有様だった。憤怒の形相で彼に喰らいつく。だがナハトは鋭い牙が並ぶ大口をバック

ステップで避け、神機を剣形態から銃形態に変形させると、マントの隙間に銃弾を撃ち込んだ。青い軌跡を描いて胴に着弾し、衝撃にヴァジュラが前足を浮かせた。苦悶に体をのたうつ獣にさらに銃弾を撃ち込み、再び神機を剣形態へと変化させる。何度か顔を斬りつけたあと、ナハトが刀身をヴァジュラに向けたまま衝撃に耐えるポーズを取った。刀身がわずかに上方向へ跳ね上がり、銃身が伸びる。ドンッという爆発音が空気を震わせた。

新型神機使いのみが扱えるロングブレード特有の技【インパルスエッジ】だ。

半ば剣形態の状態で銃撃をするため隙が小さく、すぐさま次の行動に移れるという利点を持つ。

銃身から発射された爆弾はヴァジュラの顔に直撃し、すでに崩れかけていた右半分の装甲を吹き飛ばした。割れた装甲の欠片が獣の右目に突き刺さった。獣の悲鳴が轟く。

ナハトの猛攻に為す術がなかったヴァジュラがようやく反撃に出た。無事な左目を怒りでみなぎらせ、ナハトの胸を裂こうと右前足を突き出す。だがそれは簡単にバックステップで回避された。彼は近すぎず、離れすぎず、適切な距離を保っている。獣神にとってはその肉を喰らおうと企むハイエナが張り付いているようで、うっとうしいことこの上ないだろう。

ヴァジュラが苛立ちを隠せない様子で一際大きな咆哮をあげる。呼吸がさらに荒くなり、口元に紫電が走る。

「活性化したか……！」

ソーマは忌々しげに呟いた。さすがに手助けしなければと思って駆け出す。が、すぐに立ち止まった。神機が重い。見ると、無意識のうちに指令を出していたのか、神機が真っ二つに分かれたシユウの死体を喰らっていた。ただ、不思議なことに盗み食いでもしているように咀嚼する音が小さい。ソーマが見つめていると、黒い顎は一瞬だけ動きを止めた。しかし開き直ったのかいつも以上に大口を開けてシユウの右足を丸呑みし、さらに胴に喰らいつき少し下品な

音を立てて咀嚼する。
……腹が減ってんのか？　食い意地張りすぎだろ。
呑気にそんなことを考えたが、食欲の権化そのものの食べっぷりを感心している場合じゃない。
「あっちにもっと美味そうなのがいる。……行くぞ」
その声に応え、神機が捕喰形態からもとの姿に戻る。
小首を傾げ神機を見やったあと、ソーマは荒ぶる獣神に向けて今度こそ走り出した。

「ちっ……！」
ナハトは唇を噛みしめた。あの咆哮からヴァジュラの動きがさらに早くなっている。
アラガミの活性化についてはツバキから講義を受けた。アラガミの体の部位を結合崩壊させたり攻撃を加えたりするとオラクル細胞が活性化し、防御力や攻撃力の増加、特殊攻撃の使用といった現象をもたらす。なかには活性化すると破壊をした部分以外に攻撃が一切通らなくなる厄介なアラガミもいるらしい。
ヴァジュラは活性化すると素早さと攻撃力が増すようだった。
相手の動きを追うのが精一杯で攻撃に転じることができない。下手に攻勢に出れば帯電した前足や牙に体の自由を奪われるか、そのまま八つ裂きにされるだろう。
ふいにリンドウが言っていたことを思い出す。
――命令は3つ。死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れろ。運が良ければ不意を突いてぶっ殺せ。
こんな状況だというのに、少しだけナハトの口元が綻んだ。
……あの人、このセリフの時だけは真面目な顔するんだよな。

リンドウの命令には従いたいが、ここは嘆きの平原。ドーナツ状のフィールドで、高低差はなく、ついでに隠れるところもない。スタングレネードを使おうかと思ったが、回収班やリンドウと連絡が取れない以上、誰かが気付いて迎えに来てくれるまで逃げ回らなくてはならない。逃げるにしたって、こんな素早いやつが相手ならば相当なテクニックを要する。

ナハトは表情を引き締め、ヴァジュラに鋭い視線を向けた。

救援がくるまで、ヴァジュラの正面に立つ。……いまは避けて、迫った左足の爪が肩に引っかかる寸前に身をよじらせて回避。そしてマントのような器官から放出された雷球はひしゃげた装甲を展開して弾く。壊れた状態で酷使されたシールドはもはや原型をとどめていなかったが、雷球であればまだ問題なく防げた。リッカが丁寧な仕事をしているお陰だろう。

エネルギーを放出したためかヴァジュラに一瞬の隙が生まれた。

――敵が硬直したら、攻勢に転じる。

獣神の顔めがけて剣を滑らせる。横一文字に振り切った剣は最小限の動きで避けられた。それならばと、柄を左手だけ逆手に持ち替え、体の方へ神機を引き寄せると、そのままの勢いを殺さず突き出す。ドスッと音を立て筋肉質な肩に刃が吸い込まれた。獣の悲鳴。ヴァジュラの顔を蹴り飛ばすように右足を置き、思い切り力を込めて剣を引き抜く。すぐさま左へサイドステップ。ヴァジュラを中心に円を描いた放電。およそ3メートルの半径と高さの半球に包まれる寸前に脱出が成功する。雷の結界が発生している数秒は一息ついて、それが終えた瞬間ヴァジュラの足下へ滑り込み、弱点のひとつである左前足を切り刻む。返り血が顔や服に大量にかかるが気にしていられない。たかる虫を払うようにヴァジュラが右前足を振る。とっさに逃れて距離を取った。

「っ……ハァ、ハッ」

ナハトは目元に流れた汗を乱暴に拭った。

息が上がっている。体力的に限界が近い。だがそれはヴァジュラ

も同じだ。前足と尻尾が結合崩壊し、顔の装甲も崩れかけている。そのほかにもオラクル細胞の結合が弱まってきたせいか大小様々な傷が修復されないまま全身に刻まれ、もはや死に体といった様子だ。

ナハト自身はそれらしい怪我をしていなかった。戦闘開始直後、装甲を壊された際に全身を強打したくらいで体の表面は出血もなにもない。

有利ではあるが、気を抜ける状況ではないことは確かだ。

ナハトは時間をかけ着実にダメージを蓄積させることができても、神機の性能上、大きなダメージを与えることができない。対してヴァジュラはすべての一撃が重く、攻撃が当たりさえすればナハトの体など簡単に壊すことができるのだ。

「はぁ……」

盛大にため息をついた。

全身が重い。神機を持つ手が痺れている。湿気と汗と返り血で服と髪が肌に張り付いて不快感を催す。こんな事態にならなければ今頃はアナグラに帰還してシャワーを浴びていただろう。もっとも、オラクル技術のお陰である程度循環分配がうまくいっているとはいえ資源枯渇の問題は解決されておらず、湯の供給は1日あたり1人5分と決められている。しかもゴッドイーターなら腕輪認証で、職員なら専用カードできっちり時間通りに湯が出るという徹底ぶりだ。ちなみに日本人が好んだとされる風呂は一部のベテランと職員が申請してやっと使うことができる。

ナハトは不衛生が嫌いだった。ついでに不衛生な場所に集う、黒光りする装甲とワサワサ蠢く触覚を持つアレも大嫌いだった。不潔な格好をしていると、アレが寄ってきて体に張り付くんじゃないかと身震いしてしまう。

「……とりあえず目の前のヴァジュラをどうにかして、誰かが迎えに来てくれて、ツバキ教官とリンドウさんに不注意を怒られて、……ああ、あと装甲を壊しちまったこと、リッカに謝らなきゃ。……シャワーはそれからだな」

息を肺いっぱいに吸い込んで、吐き出す。ギッと獣を形取った神を見据え、
「予定が詰まってるんだよ。さっさと終わらせてくれ」
その声に鳴動するようにヴァジュラが動いた。高らかに吠え、後ろ足をバネにして跳躍する。
圧倒的な質量と重量を持ったそれがナハトに迫る――。

勝負はすでに佳境に入っていた。ナハトが回避に失敗して喰われる、もしくはヴァジュラに止めを刺すか、ヴァジュラが最後の力を振り絞りナハトを引き裂くかといった状況だ。
ソーマは迷いに迷ったあげく、死角から戦闘を見守ることを決めた。状況に応じてすぐに動けるよう、神機を構え戦闘態勢を崩さない。
ヴァジュラが活性化したのを見て、ナハトでは対応しきれないと判断した。だから神機の欲求を押し退けて救援に向かった。だが、予想に反してナハトは翻弄されつつもしっかりと敵の動きを把握していた。ヴァジュラが攻勢に出た時は回避に徹し、隙を的確について反撃に出る。新兵とは到底思えないほどの状況判断だ。ふつうの新兵であれば敵の隙や攻勢のチャンスがわかっても体が動かない者がほとんどだ。しかし天賦の才なのか、ナハトはそれをやってのける。
サクヤが初めてナハトのバックアップをした時に言っていた。新人とは思えない動きだった、と。その言葉を疑ったわけではないが、人のいいサクヤのことだ、とソーマはそれを聞いて適当に流していた。だが今になって彼女が伝えてきたことを理解する。そしてある予測を立てた。
使用する神機を強化できていれば、ナハトは初見でヴァジュラさえも倒すことができる。

「……これが新型の能力ってやつか？」
ソーマは苦く笑った。
慢性的に人手が足りない状況を鑑みれば、手のかからない新兵は即戦力としてとても有り難いものだ。すぐさま上層部の目にとまり有効に使われるだろう。しかしそれは同時に死期を早めることになる。
誰よりも強く、そして誰よりも優しい者から順に死んでいく。
ソーマは誰よりもそれを知っていた。
「ちっ……」
頭を振って余計な考えを振り払う。そもそもナハトのことなぞどうでもいいのだ。リンドウに頼まれて救援に来ただけなのだから、その後のことなんて考える理由も意味も義理もない。
「さっさと終わらせろよクソッタレが……！　いつまで猫野郎と遊んでやがる」
イレギュラー事態や討伐許可すら下りていない強敵を相手にすることへの同情を消し去って悪態をつく。そうしなければ矛盾を孕んだ心が嫌な方向へと進んでしまいそうだった。
ヴァジュラの飛びかかりを避け、ナハトが銃形態に変形した神機でエネルギー弾を撃つ。貫通攻撃に弱い胴に次から次へと銃弾が吸い込まれ、獣が絶叫する。ヴァジュラはすぐさまナハトの方に向き直りマントを逆立てた。雷球を生み出す気だ。しかし、空気が帯電した瞬間、巨体の至る所から鮮血が噴き出し、そのままくずおれた。形になりかけた電気の集まりも小さく爆ぜて消えてしまう。
「ファンブル……」
アラガミが血を噴いて攻撃に失敗するのは死に瀕している証拠だ。あともう2、3撃を加えられれば、もはやナハトの勝利は疑いない。彼もそれを確信したのか、神機を剣形態に戻し血だまりの中へ地を蹴って踏み込む。
剣戟を受けた無残な顔にさらに刃を叩き込もうとして――、
「ッ、バカが！！」

鋭い叫びをあげてソーマは飛び出した。
攻撃の前兆に気付いたナハトが飛び退こうと膝に力を込めるがもう遅い。
追い詰められたヴァジュラが最後の力を振り絞って壮絶な咆哮とともに放電する。それは獣を中心として直径１０メートル、高さ５メートルの巨大な半球を描いた。絶対に逃れようがない雷の結界に閉じ込められたナハトが声にならない悲鳴をあげて体をよろめかせる。
なんとか倒れずに済んだ彼だが、神機を掲げようとして逆にガクリと膝をついた。無理もない。アラガミの遺伝子を取り込んだゴッドイーターの強靱な肉体だからこそまだ生きていられるが、あんなものを喰らったら普通の人間なら消し炭になっていたところだ。
地に突きたった神機にもたれかかるようにしてビクビクと痙攣する体を押さえている。顔だけはなんとかヴァジュラの方を向くが、それで獣神が怯むはずもない。
当然この機を敵が逃すわけなく、動けない獲物を仕留めようと牙を剥きだして突進を始める。
ソーマは地を蹴って跳躍し、ぜいぜいと肩で呼吸をするナハトの少し前に着地した。背後の青年が持つ汎用シールドよりも大きく重厚なタワーシールド――リジェクターをヴァジュラの顔がぶち当たる前に素早く展開する。

ナハトは一瞬なにが起きたのか理解できなかった。
最後の最後というところでヴァジュラの放電を受け、体の自由が利かなくなって、己の失策を恨みながら死を覚悟した。自分の体の血流の音がやけにうるさく鳴り響いて獣神がこちらに向かってくる足音すら聞こえない。頭がぼんやりして目の前の事象すべてが白く霞み、ゆっくりと時を刻む。キィィィン……と甲高い耳鳴りが少し

ずつ大きくなり、ほどなくして脳全体を支配する。そして静寂が訪れた。
結局、なにも分からず終いだったな……。
静かにまぶたを下ろし、迫り来る死の瞬間に身を委ねようとした時だった。
激しい衝突音が鼓膜を殴打する。
ハッと目を見開くと、現実が猛スピードで戻ってきた。
時が進み、目の前の光景が色味を帯びる。
ナハトの眼前に青いコートについたフードで頭をすっぽり隠した青年の背中があった。神機の装甲でヴァジュラの頭を受け止めている。
忙しない獣の呼吸と青年の舌打ちが耳に届いた。
「あんたは……」
「動けるならさっさと退け！！」
ザイゴートが墜落し、コクーンメイデンが仰け反って気絶するくらいの剣幕で怒鳴られた。思わず体がすくむ。だがそれも一瞬でナハトは体を叱咤して動いた。
ヴァジュラがソーマを振り切ってナハトに飛びかかる。ここまでの傷を負わせた者を絶対に許さないつもりか、すれ違いざまソーマに顔の右半分と装甲を完全に壊されても怯まなかった。
獣神の牙が肩に突きたてられる前に全身をバネにして後方へ下がる。飛び退いている最中に神機を銃形態に変形させた。着地と同時に大事に取っておいた特別な弾を助けてくれたフードの青年――ソーマに向けて3度発射する。
【リンクバースト】。生きているアラガミを捕喰した際に奪取できるエネルギー弾で、それを受け渡すと味方を強制的にバースト状態にさせることができる。弾を撃てる銃身と捕喰形態にさせることができる新型神機使いのみが扱える特別なバレットだ。神機の暴走および使用者の体のダメージへの配慮から重ねがけによる強化は3段階までに制限されている。

一気にレベル3まで能力を強化されたソーマが驚いたような顔をしているのが見える。
「……わりぃ、あと頼んだ」
もはや避けるだけの力が残されていなかった。一度剣形態に戻してから装甲を展開するのでは間に合わない。ナハトは銃形態の神機を掲げて、なおも襲いかかってくるヴァジュラの口を塞いだ。
「バカ野郎！　無茶するな！」
ソーマが焦った声を出すが、その忠告を無視した。この体勢ではもうふんばるしか道はない。
神機を挟まれた口の隙間から血と唾液をまき散らしながら獣神が暴れ狂う。ヴァジュラの背後には、ノコギリ型の巨大なバスターソードに禍々しいオーラを漂わせたソーマ。なんとか時間を稼がなくては、としびれる両腕に喝を入れ力を込めた。
あともう少し。ソーマがチャージクラッシュを叩き込めば――、
その願いも空しく、予測できない軌道を描いた鋭い爪がナハトの胸を裂いた。
「うあああぁぁぁっ！！」
鋭い痛みが走って、一瞬遅れて血が噴き出る。それと同時に膨大な熱が生まれた。胸を灼熱の炎で焼かれているような痛みに気が遠くなる。神機を支える腕が力を失った。膝が折れる。そのまま体勢が崩れて、背中から赤く濡れた大地に倒れた。
「くそッたれぇぇぇぇぇぇ！！！！」
絶叫にも似た咆哮がソーマの口から発せられる。起き上がろうと肘をついたが失敗してまた血だまりのなかに倒れた。首から上だけを動かしてみると、ナハトを喰らおうと大口を開けていたヴァジュラの顔の中央からなにかが突き出ていた。よく見ると脳天から鼻先にかけて赤い線ができている。なにかの正体がわかった。だからこそ、ナハトは目を疑った。
「――っ！！」
ソーマの鋭い呼気。

ヴァジュラの鼻先から突き出ていたノコギリの刃が動き出す。口元、のど、胸元。下方へ向け進んだ鮫歯はついに獣神を左右に引き裂いた。
凄惨な姿で暴れ狂っていたアラガミから赤い水が噴き出ている。
神機使いに成りたての頃、自室のターミナルからデータベースをよく漁っていた。
ヴァジュラが生み出す光景は、アラガミ出現前、平和な街の公園の一角に設置された噴水が飛沫をあげる様によく似ている。
遠慮なく浴びせられた鉄臭い水に、こんなシャワーは浴びたくなかったとぼんやりと思った。
「あんたのチャージクラッシュ、すげぇな……」
自分でも驚くぐらいか細い声が出る。
ああ、もう、疲れた。
ゆっくりと目を閉ざした。目蓋の重さに抗えない。
ソーマがなにか叫んだようだが、それに耳を傾けることもできなかった。
ナハトは一度浮上した意識を再び泥沼に沈ませた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４　ヘテロクロミア（後書き）

（@ｓ@）「チラッ」
（＾ｎ＾＃）「ナズェミテルンディス！！」

遅くなり申したｏｒｚ
うっはー戦闘描写だけで終わってしまった。
ナハトもくたばってるけど書いてる私も読んでたあなたも疲れてるはずだ、きっと。
なので目を休めてくださいね。

読んでくださってありがとうございました！
次回は少し…早く…だせ…る…はず…？

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５　リンクエイド（前書き）

Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ
アリサ・イン・アンダーワールドでは、リンクエイドを腕輪を合わせた状態で行っていましたが、私が書くものはタッチ式です。
ご了承くださいますよう、お願いいたします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５　リンクエイド

「チッ……馬鹿野郎が……！」

ソーマは吐き捨てるように叫んだ。

バスターソードを振り下ろした姿勢のまま動けずにいた。長大な刀身を囲っていたエネルギーはヴァジュラを叩き斬った後、役目を終えすでに消え失せている。体の内側から沸き上がる獰猛な衝動を押さえようと深呼吸を繰り返した。

この感覚には慣れているはずだった。毎日のように繰り広げられる偽りの神との戦闘。その時間のなか、アラガミを喰らいバースト状態になると血が沸騰するような興奮を覚える。

『目の前のすべての敵を喰らいつくせ！』

そう、何かが叫ぶ。あとは接続した神機からなだれ込んでくる本能に同調し、目に入ったものから粉砕していくだけだ。

しかし、慣れていると思っていたこの感覚にまだまだ先があることを知った。新型神機使いであるナハトから、リンクバーストＬＥＶＥＬ３を受けたからだ。

……なんだ、この力は。

目の前には体を真っ二つに両断され左右がズレた状態で死を迎えたヴァジュラがいる。

本当に自分がこれをやったのか、ソーマは俄（にわか）に信じられなかった。

シユウなどの中型で人の形をしたものならば、先のように重力を味方にしてチャージクラッシュを叩きつければ両断できた。しかし、ヴァジュラなどの大型アラガミは細胞の結合が強固ですぐに再生してしまうため、どんなに強力な攻撃を与えても一撃で仕留めるなんて芸当はできなかった。だが、それは条件を満たせば可能だということを目の前の事象が示している。

「ヤツの攻撃でヴァジュラの細胞結合が弱まっていたか。それに加え――」

ソーマが視線を少し上方向へ向けると、銃形態の神機を握ったまま体を地に投げ出した青年がいた。胸のうちを氷のような冷たい手にまさぐられたようだった。のどが引き攣る。

「おい」

こんな状況でも収束しない破壊衝動を抑えるため大きく呼吸を繰り返しながら、歪な形をしたヴァジュラを通り越し、目蓋を閉ざしたナハトに声をかける。返事はない。

獣神の爪痕は、狙撃兵に支給される機能的な黒いブレザーの右肩から左の脇腹にかけて、赤く滲んだ4本の線をつくっていた。裂かれた上着から覗く肉も例に漏れず爪の餌食になっていて、鋭利な切断面から白い棒状のものが垣間見る。炭化した肌は驚異的な新陳代謝を持つ体内のオラクル細胞により回復されつつあるが、もとの肌の色である白とそうじゃない色とが入り混じり斑模様（まだらもよう）となって痛々しい。

落ち着け、とソーマは自分に言い聞かせた。

新兵のくせにヴァジュラとやりあって、しかも殺しかけた馬鹿がそう簡単に死ぬはずがない。

よく見れば胸が呼吸に合わせわずかに動いている。だが、肌は血の気を失い青くなっていた。太陽を隠した暗い空からついに雫がこぼれはじめる。

奥歯をギリッと音が鳴るほど噛みしめた。ソーマは横たわったナハトの傍らに片膝をつくと、無残な様相をさらす胸にそっと右手を置いた。

「――【リンクエイド】」

静かに呟かれたそれは、祈りにも似ていた。赤い腕輪の接続口から1本の黒く細い触手が姿を現し、横たわった青年の胸に突き刺さる。その瞬間、生命エネルギーの奔流が起きた。新緑を思わせる暖かく穏やかな光が、ソーマからナハトに向け、つながった触手を通し洪水のように流れていく。

それもわずか数秒で終わり、ソーマは全身を襲う脱力感に忌々し

げに舌打ちをするとその場に座り込んだ。触手を巻き戻し右手を退ける。骨が覗いていた血まみれの胸はもとの姿を取り戻していた。炭化した肌が剥がれ落ち、色素が欠乏した白い肌が現れる。

リンクエイドはゴッドイーター同士で行える緊急蘇生法だ。生命エネルギーを分け与えることで、倒れた味方のオラクル細胞を活性化させ自然治癒力を限界まで高め、怪我を治すことが出来る。だがエネルギーを与えた方は倦怠感と脱力感に襲われるため細心の注意を払わねばならない。戦闘中にリンクエイドで治療を行う場合は、スタングレネードで敵の行動を止めたり他の味方に援護をしてもらわねば敵に自分の隙を与えることになる。そうなれば治療の失敗どころか全滅の危機に陥ることになる。リンクエイドの前後と最中は戦闘中、もっとも死に近づく瞬間と言っていいかもしれない。しかし運良く治療を終えたとて安心はできない。アラガミはリンクエイドに反応する。生命エネルギーを分け与え治療を行った者を、真っ先に狙いに行くのだ。

今回は戦闘終了後であったためリスクは少ない。もし、戦闘中にナハトが倒れていたら――暴れ狂うヴァジュラを相手にしながらリンクエイドに向かうなど、あまり考えたくないことだった。

「世話のかかる野郎だ」

ソーマは空を見上げた。水滴が細い白い線となって地上に降り注ぐ。雨脚が強くなってきた。こめかみから目尻、頬にかけて流れる水滴を払って、視線をいまだに目を覚まさないナハトに向けた。鮮血のシャワーを浴びた服や肌を雨が洗い流していく。

「やっとか……」

体の内側から発する光がようやく消える。並のゴッドイーターよりも長いバースト時間が終わり、破壊衝動も終息を迎えた。

こんな状態でよくリンクエイドなんてできたものだとソーマは嘆息をもらした。

「さっさと起きろ」

右足を伸ばしてナハトの肩を軽く小突く。自分でも足癖が悪いと

思うが、遠慮するに値しない相手だ。勝手にリンクバーストＬＥＶＥＬ３にさせられたのだから、このくらいの報復はやっても罰は当たらないだろう。
……チャージクラッシュの形成速度上昇、威力の増加、か。
「ヴァジュラを両断するほどの」
ガッ。もう一度、肩に踵をお見舞いしてやった。

なんか忘れてる。

朝起きる直前まで見ていた光景が目の前に広がっていた。
黒い腕に腹を貫かれている。ごふっと音を立てて咳き込むと、口から血が噴き出した。赤い小さな球がいくつも宙に舞う。少年は自分を殺す腕を撫で、ゆっくりと目蓋を閉ざした。
そのさまを、ナハトは少年の器についた双眸からではなく、白い空間の上空に浮遊した状態で見ていた。
なんだ、この光景は……。
黒い腕が華奢な体から引き抜かれた。重力に逆らって少年の体が浮かび、霧から伸びてきたもう１本の腕に捕獲される。腹に開いた穴から止めどなく血が流れ、大小さまざまな球をつくる。
ぎゅっと胸元を掴んだ。なんだかやけに胸が苦しい。万力で締め付けられているような痛みだ。だが、痛みだけじゃない。
少年の骸は人形のようにぐにゃぐにゃと弄ばれたあと黒い霧の中へ引きずり込まれた。
そこから聞こえてくる、肉を裂き、骨を砕く音が、耳朶を、精神をつんざく。
こんな光景を目の当たりにしているのに、嬉しくて、切なかった。泣き出してしまいそうなほど。それはどこか、懐かしい友人と再会した時の感覚に似ていた。暖かい気持ち。そして――

「……てくれ……」
みっともないくらい震えた、小さな声が出た。のどに灼熱の痛みが走る。
「やめて……っ」
両手で顔を覆い隠し、ナハトは声を引き絞った。
得体の知れない想いがこみ上げてくる。刃のように暗く底冷えする光を持った感情だった。恐怖を感じる暇も与えられず、それに胸の内をずたずたに引き裂かれ、呼吸すらできないほどの激しい衝動に駆られる。

こわしたい。いますぐ、

――なんのために。誰のために。なにを得るために。
「わからない……っ」
心のなかの、深く暗い底からなにかが手を伸ばしている。その手を掴めばなにかがわかる。わかるのに、知るのが怖くてその手を掴めない。
――怖い。
「っ……いやだあああ！」
聞き分けのない子供のように喚き散らした。
頬から首へと手を払った。爪を食い込ませた状態だったため、引っ掻いた額から頬から血が流れる。酸欠になったように忙しない呼吸を繰り返しながら再び顔を覆った。
たかが夢なのに。
冷静というより、やる気を感じさせないいつもの自分の声がした。
頬の鋭い痛みのせいだろうか、客観的な自我が生まれる。
目をきゅっとつぶり、荒い呼吸の合間に冷静な自分の言葉を復唱した。少し落ち着きを取り戻す。目蓋を開き、歪んだ視界に死んだ少年と黒い腕を呑み込んだ黒い霧を捉えた。
刹那、誰かに肩を揺さぶられた気がした。

驚いて周囲を見回す。だが、ただ白が広がっているだけで人の姿は見当たらない。視線を戻すと、黒い霧は忽然と姿を消していた。塵ひとつ、少年の血の雫すら残さずに。

「なんで……」

呆然と立ち竦んでいると、今度は少し強い衝撃。右肩の同じ場所だ。揺さぶられたというより、殴られたに近いかもしれない。

見えない攻撃に警戒心を強める。体を浮遊させた状態で対人格闘技の戦闘態勢を取った。なにも持たない両手を握ると、手に馴染んだ感触があった。掴んだものは神機の柄だった。すでに腕輪と接続されている。

「……あ」

血に濡れた刀身を見て思い出した。

この白い世界に来る前、自分が何をしていたのかを。

「っ！」

ふいに閃光弾を投げつけられたように視界が焼ける。そして、ぐんっと体が引かれる感覚。

白よりも真っ白に染まる視界の中、ナハトはそれを見た。逆光に照らされ黒いシルエットしか見えないが、それは確かに少年が、ナハト自身が持っていたものだ。

細い鎖に繋がれた、ネームプレート。

「待って！」

精一杯手を伸ばした。だがナハトを引っ張る力とネームプレートを引き寄せる力は逆方向へと作用していた。骨が軋むほど伸ばした腕は、それを掴む直前で引き離された。ネームプレートが鎖によって擦れる音を立てながら、ずっとずっと遠くの空間へと転がっていく。

「いやだ……それは、オレの……」

白い世界は死を迎えたように闇に閉ざされた。

あきらめきれず手を伸ばしたまま叫ぶ青年を、現実へと突き返して。

もう一発蹴ってみようか、というところでナハトがうめき、微かに目を開いた。ぼんやりとした目でこちらを見て何事か呟いたあと、首を右肩の方に向け「うわぁ！」と短い悲鳴とともに飛び起きた。
直撃するはずだった踵が紙一重で避けられ、ソーマは舌打ちをした。
「な、な、なにを――」
「手間を取らせるな」
目を白黒させるナハトの言葉を遮ってにべもなく言い放つ。釈然としないようすで押し黙る彼だったが、ハッと弾かれたように胸に手を当てた。
「……治ってる」
あんたがやったのか？　となぜだか不審を抱いた目で見られ、多少の苛立ちを覚えながら立ち上がる。
「リンクエイドだ。それくらい知ってるだろ」
そうじゃなくて、と青白い月の色をした双眸が訴える。目は口ほどにものを言うとはよく言ったもので、無表情に見えても目は感情を正確に映している。やがて返事をあきらめたのかナハトも立ち上がった。ささやかなため息をひとつ吐いて、ヴァジュラの一角を指さす。
「なぁ、そこ。ヴァジュラの右半身、下腹部に近いところ」
「……あ？」
意味が分からずギロリと睨んでみるが逆に睨み返された。ナハトが全身にみなぎらせた威圧感に少し感心する。並の神機使いならこの視線だけで体が竦んでしまうかも知れない。
本当に衛生兵かこいつ。
彼の目に映った自分が少し意外そうな顔をしているのが見えた。ナハトも同じで、こちらの目を覗き込むと、

「あれ……？」
目をしばたたせた。
怪訝な表情を隠しもせず「なんだ？」とぶっきらぼうに問うと、ナハトは慌てたようにブンブンと手を振った。
「いや、なんでもない。それより早く捕喰を」
彼はヴァジュラの右の下腹部に向け再び指をさした。ソーマが横からもう一度ナハトの目を見やるが、その真意は計れなかった。
言われた通りに神機を捕喰形態にフォームチェンジし狙いを定める。ここでいいかと視線で質すと、ナハトが無表情に頷いた。
神機に許可を下す。今か今かと食事を待ちわびていた顎（アギト）は目を見張る早さでヴァジュラの肉に喰らいついた。ナハトが指定した部位をナイフのような牙で噛み切ると、そのまま咽喉を鳴らして丸呑みした。貪欲なまでの食欲は止まるところを知らず、引き千切った部位から次々と食事という名の侵略を始める。
ナハトと揃って唖然と見守っていると、神機の中枢パーツに埋め込まれた黄色いコアがきらりと光を放った。レアモノ――今回の場合、ヴァジュラのコアだろう――を入手したサインだ。
「助けてくれた礼だ。あんたにやる」
ソーマが己の神機に向けたものと同じ視線をナハトに向けると、青年は目を伏せて「オレはまだ必要ないから」と呟いた。神機が銃形態から剣へと変わり、直後中枢パーツが爆ぜ、触手が絡み合って巨大な顎を形成する。流れるような動作だった。
「大事に取っておいても使わないうちに死ぬかもしれないしな」
そう言って、ヴァジュラの左半分の顔を捕喰形態に移行した神機に喰わせる。ふた振りの神機が織り成す咀嚼音が、この時ばかりは不吉なものに感じられた。神機は制御されたアラガミに他ならない。ともに戦場で戦う相棒といえど、それは変わりようのない事実だ。アラガミは、無機有機問わずなんでも喰らう。そして、アラガミが生物を喰らう音は、人間も動物も種別によってそう変わらない。この、命を食い千切る音が、世界にいたるところで繰り広げられてい

るのだ。今この瞬間だってアラガミに喰われる人間がどこかにいる。うまそうに咀嚼され、断末魔の叫びをバックコーラスに代用されて死んでいく人間が。

「……いま必要なものはなんだ」

思わず口を突いて出てきたセリフにソーマ自身が驚いた。案の定、ナハトが口を半開きにした間抜けな顔でこちらを見ている。盛大に舌打ちをして「さっさと答えろ」と低い声で脅した。

「低強度チタン……」

おずおずとナハトが答えた。さきほどの威勢はどこへ行ったのか。今は小指の先でちょっと押しただけで尻餅をつきそうな、そんな弱々しい雰囲気を出している。

「……考えておいてやる」

いつになく不機嫌な声が出た。指令を送ると、満足した様子で神機が触手を巻き戻し、もとの中枢パーツの形に収まった。ポケットに入れた携帯端末を取り出し、ナハトに背を向けて歩き出す。背後で焦ったような声がするが無視した。

まずは回収班に連絡。リンドウにはそれからで十分だ。いつも面倒事ばかり押しつけやがって、あの男。

携帯端末の小さなボタンを素早く操作し、ふと思ったことを背後からトボトボ着いてくる青年にほとんど尋問口調で問いかける。

「お前、なぜ救援要請を出さなかった」

ナハトは目を泳がせたが、ソーマが目を細めるとすぐに観念して「ヴァジュラに踏みつぶされた」とどこか開き直ったように答えた。

「あきれた奴だな」

ため息しか出てこない。ソーマはコールボタンを押すと、携帯端末をフードに隠された耳に当てた。すぐに繋がった相手に手短に用件を伝え、合流ポイントへと油断なく歩みを進める。

雨が激しく体に叩きつけられる。携帯端末の液晶が見えないくらいだ。あきらめてヘリの中で報告を済まそうと思い直す。時折背後の新兵を気にしながらソーマは別な思考に頭を悩ませた。

ヤツはなぜ的確なコアの位置がわかった？
ヴァジュラがコアを庇うような動きを見せたか……？
どんなに考えても答えを導き出すことができず、ソーマは雨が降りしきる平原をひたすら注意深く突き進んだ。
ふと肩に担いだ神機の中枢パーツを見据える。ヴァジュラの素材は神機の強化にちょうど必要だったところだ。考えてみれば、少ない労力で貴重なものを手に入れられたものだ。
「低強度チタンなんて、倉庫に山ほどあったな……」
素材を欲している本人に聞こえないように呟いた。忘れかけていたが、彼はちゃんと新兵なのだと再認識する。欲しがる素材が実に新兵らしい。難敵ヴァジュラを瀕死に追い込んだ姿を見たせいか、新兵なんて肩書きは似合わなすぎて片腹が痛くなる。
「大馬鹿野郎が」
どこか優しげな響きを含んだ罵倒が、白く線を引く水滴をまき散らす空に吸い込まれて消えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５　リンクエイド（後書き）

今回の文字数は６０００とちょっとです。
読んで頂き有難うございました！

うおお…某所で頂いた貴重なご意見をどう活かすか考えていたのですが、やはり今までの部分は変えず（誤字脱字は修正しますけどね）、これからの展開で巻き返す方針でいくことにしました。
これから物語が動き出す予定です。私に皆様のアドバイスを活かせる技量があれば、の話ですけどｏｒｚ
（あの時はお世話になりました。とても励みになりました！）

頑張って行きますので、気が向いたら見に来てやって下さい。
どうぞよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0172w/

LOST MAN ～I'm your メディーーーーーーーーーーック！！～

2011年10月21日07時03分発行